

刊行にあたって

このたび、私の敬愛する母校福岡工業学校の創設時の人たちに光をあて、「明治の工業学校に生きた人々」という副題にて、わが校の沿革史とも言ふべき「列伝」が出版されるにあたり、元工友会長の立場から私の考え方を述べこの快挙に心よりお慶びを申し上げたいと存じます。

私が福岡工業学校に入学したのは、太平洋戦争末期の昭和19年4月、荒江分校(現在の本校)校舎は木造二階建てで未完成のままストップした状態で、入学式は実習工場で行われたと記憶しております。昭和20年終戦となり、昭和25年3月講堂も体育館もなく、やはり実習工場で卒業式が行われました。

爾来、60年を経て最近では昔のことが頻りに想い出されます。とくに自分の青春時代を6年間も過ごした母校のことは忘れようとしても忘れられるものではありません。

しかも「福工」と言えば日本でも最も古い工業学校のひとつだと言われ、それだけの伝統と歴史を誇り、教育もそのように衿持を持って育てられたと自負しております。

ところが、その母校(湊町本校)が昭和20年6月19日の福岡大空襲によって灰燼に帰し、明治以来の貴重な書籍や資料など一切を失ったのであります(それは当時大学にも無い文献や研究のデータであったと聞いております)。

それぞれの学校にはそれなりの歴史と伝統があります。しかしながら、わが校のそれは他校と較ぶべくもないほど深遠なものであります。

明治維新後、近代国家を目指して諸制度の改革を行い、特に工業化への道は国是として不可欠であったのであります。

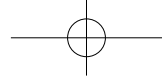
それに応じて創立されたのがわが福岡工業学校であり、当時の卒業生の行動と思考の軌跡を追うことが是非必要であると思います。

その結果、先輩諸氏の思考、気概、行動、仕事にたいする情熱などを窺い知ることができるのではないのでしょうか。

それらの積み重ねが長い時間をかけて伝統として伝えられていくのだと

「列伝」ホームページ
<http://www.000000.jp> (仮)

福岡工業学校教師、卒業生について
本書に掲載できなかった情報を随時更新しております。
ぜひご覧ください。



思います。

私はそれを地道な努力の励行だと解しております。

前述のように校舎もとより多くの貴重な設備や資料なども失った今、歴史や伝統を具体的に証明することは困難であります。

だからと言ってそのまま放置してよいとは考えられません。時が経てば資料などはさらに逸散してしまうでしょう。その前に何とか早く可能な限りのことをしなければならぬ、との思いがありましたところ、天の配剤と言うべきか、香月経男元本校教諭(機械36年卒)も同じ思いでおられ、母校の事を一途に思う理念から独力で資料の収集から執筆まで丸3年間で費やして漸く巻Iが終了したものであります。この間の先生の並々ならぬ献身的努力には頭のさがる思いとともに満腔の敬意を表する次第であります。

本書を巻Iとしたのは明治時代及び大正初期の先生や卒業生の方に限ったからであり、次巻以降は次世代の方に引き継いで頂きたいと思います。

何を今更と思われる方もあるかと思いますが混沌とした世情の中、福岡工業高等学校の生徒諸君が、今何を為すべきかを自覚することの一助になればとの思いと長い歴史と伝統に想いを馳せ、自己研鑽に励み、自信と誇りを持った社会有為の人に成長してほしいと願うものであります。

顧ますと戦後65年のあいだ、物的に満たされることのみをよしとする価値観至上となり、「真の価値とは何か」と言うことが見え難くなっている昨今、歴史を踏まえた母校の真の教育は必ず真価を発揮するときがくると信じております。本書の刊行にあたり、香月先生に大変な尽力を頂いたことに改めて感謝申し上げます。

最後になりますが先輩の意を体し、更なる伝統の形成のため、諸君のご奮闘を祈念してやみません。

平成22年5月吉日

財団法人福岡工業工友会 元会長 石井 金蔵

序文

近年、社会の変化は産業界を含めて、国際化、情報化はますます進展を深め産業構造とこれに対応する就業構造も変化をみせています。このようなか、工業教育もこれらの状況に応じるようにその内容と方法が求められています。新しい科学技術に目を向けてそれぞれの専門的知識を学び生かせるようにしなければなりません。しかしながら、新しい知識・情報をとり取り入れ理解し応用発展させるためには、工業の各分野に必要な基礎的・基本的知識は欠くことはできません。そのためには、直接それぞれの領域に関係する基礎的学理を学ぶことはもとより、学びの源泉となる興味関心も大切な条件であります。これを喚起するもののひとつに、先達の存在を知ることがあります。ましてやそれが同じ学舎の先達であれば一層その意味を帯びることになると考えます。

福岡県立福岡工業高等学校は、明治29年(1896)の学校創立以来今日まで114年の歴史を刻んでまいりました。

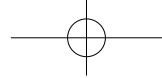
この間には、多くの卒業生と彼らを教え育てた教師の存在とその営みがあります。それらは、いろいろな形で記録に留められているのですが、昭和20年の戦災による学校の焼失で多数の資料が失われました。そしてその後の時の流れは、形あるものだけでなく残念なことにはそれぞれの人物にまつわる足跡も薄れさせていくものであります。

このような時に、本校の百年史と百十年史の編纂にかかわられた、香月経男元教諭は、在職時から関心をもって資料の収集と調査を続けられました。この度、福岡工業工友会石井金蔵元会長の監修のもとに「列伝」の形で教師と卒業生の足跡をたどり、新しい発見を含めて一巻となし上梓されたことは、本校の正史の細部を補う意義あるものであると思います。

ここに、本書の刊行が福岡工業高等学校のさらなる歴史の歩みを見つめるよすがとなるものと確信して多くの関係諸氏に読まれることを祈って序文といたします。

平成22年5月

福岡県立福岡工業高等学校 校長 野見山秀樹



はじめに

一枚の写真

この1枚の写真は、日本の建築史に大きな金字塔として聳え立つ位置を築いた建築家辰野金吾の還暦を祝って催された、「辰野工学博士還暦祝賀会」の際に撮影されたものである。

時は、大正4年(1915)11月27日、場所は、東京上野の精養軒であった。

このときの様子が、建築学会誌「建築雑誌」(第29輯第348号大正4年12月)に詳しく掲載報告されている。

この写真は、辰野から当時大阪の辰野片岡事務所に勤務していた徳永庸に贈られたものである。

徳永は、福岡県立福岡工業学校(現福岡県立福岡工業高等学校)建築科を経て大正2年(1913)に早稲田大学理工科建築学科を第一回生として卒業して辰野片岡事務所に勤務していた。

徳永は、福岡工業学校最終学年の4年生が行う実務練習において東京の辰野葛西事務所研修を受け、卒業後に早稲田大学に進んでいる。



ときしも徳永は、辰野片岡事務所が担当した大正4年6月に起工した大阪市中心公会堂の建設工事に忙殺されて祝賀会に出席できないでいたのである。

写真には、最前列中央の辰野金吾を中心にして95名の人びとが写っている。辰野とその家族や友人の夫人達を除く80名の人びとは辰野の協同経営者である東京の葛西萬治、大阪の片岡安をはじめ辰野葛西および辰野片岡事務所勤務の関係者である。辰野が明治17年12月工部大学校教授就任以来、帝國大学工科大学(後東京帝国大学、現東京大学)在任中に直接教えを受けた人つまり大学の後輩でもある人たち16名、残る64名は早稲田大学、東京及び名古屋高等工業学校、工業学校、工手学校その他独学で建築を学んで辰野のもとで建築の実務に携わっている人々である。

これらの人々は日本の建築界をリードする二つの代表的建築事務所に勤務する技術者達の、いわば華麗なる一群とってよいであろう。

このような人々のなかに福岡工業学校建築科の卒業生7名が写っている。

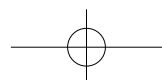
この7名の人物は、久恒治助(明治33年卒)、平島末吉(明治35年卒)、大熊貞喜(明治37年卒)、田原政見(明治41年卒)、奥寺格(明治41年卒)、中野子先一(明治42年卒)、駒形順(明治42年卒)のいずれも建築科の卒業生である。

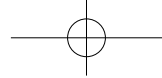
この他にも業務などの関係のためであろう、両事務所に勤務しているが祝賀会に出席できなかったおよそ7名の福岡工業学校建築科の卒業生がいる。

福岡工業学校の創立

福岡工業学校は明治29年(1896)に福岡市に設立され、関西以西では最も古い歴史を有する。福岡工業学校は一地方の工業学校であるが、このような二大建築事務所にも多くの卒業生を送りだして中央で活躍するにいたる経緯や他の学科を卒業して各分野で活躍した人物の事績と、一方これらの教育にたずさわった教師像を明らかにすることは、当時の社会が工業学校に期待した役割のなかで福岡工業学校が果たしてきたものを示すことができるのではないかと考える。

福岡工業学校の歴史や沿革については、創立以来刊行されてきている学





校一覧や戦前では大正6年の「卒業生一千人記念誌」、戦後では昭和31年の「創立60周年記念誌」以来平成18年の「創立110周年記念誌」までの10周年毎の記念誌として刊行された6冊の記念誌などで明らかにされている。

しかしながら、福岡工業学校に関わった教師や巣立っていった卒業生の事績の記録は必ずしも十分とはいえないものがあった。

例えば、明治33年(1900)建築科(当時木工科)卒業生で大正8年の議院建築意匠設計懸賞募集(現在の国会議事堂のデザイン・コンペティション)に応募して第二等に当選している吉木久吉の事績については、戦前はともかく戦後についてはその受賞の事実のみが伝えられており、その人物や受賞前後の様子についてはあまり知られていなかった。

また、伝説的に伝えられている教師や卒業生をはじめ、これまで知られていなかった人々の存在を少しでも明らかにできれば、福岡工業学校の実像がより確かなものになる。

本書の刊行にあたり貴重な情報源となったのは、3つの学会誌であった。

まず、明治19年(1886)日本で最初に設立された学会、造家学会(現日本建築学会)が翌20年から刊行してきている学会誌「建築雑誌」であった。

これには、福岡工業学校の建築科(当時は木工科)第一回卒業生以来、数多の卒業生と教師と学校名が記録されており多くの動静を求めることができる。

ついで、「関西建築協会雑誌」(後に「日本建築協会雑誌」、現「建築と社会」)は大正6年(1917) 関西建築協会として大阪に設立された建築技師をはじめとする建築関係者の団体の会誌である。ここにも当協会に深く関わった吉木久吉はじめ福岡工業学校卒業生の事績が多く記録されておりここでも新しい事実を見出すことができる。

最後に建築学会に次いで明治30年(1897)に設立された機械学会(現日本機械学会)の会誌「機械学会誌」(現「日本機械学会誌」)である。

このなかで、特に前者二誌に見られる学会入会や活動の記録は福岡工業学校史にとっては新しい発見があった。とりわけ建築学会入会の動静は本校の草創期からの斯界における存在、ひいては当時の工業学校の評価と役割一端を明らかにしているといえる。

福岡県立福岡工業高等学校は、いまや全日制8科9学級、定時制1学級の大規模校となっているが、学校創立から大正期までの歴代の学校長をはじめとする教師と染織科はじめ建築科、機械科、採鉱科の卒業生のうち限られた人たちであるがその事績を追った。

歴史が意味するもの

何事においても先達の事績を明らかにし根幹を掘り下げその在り方を確かなものにするという養生はその上に聳え立つ幹の発展には欠かせないものではないだろうか。

このように考えれば、これらの事績を新たな記録として留める意義は、現在の福岡工業高等学校が持つべき将来像へとも繋がっていくことになると考えられる。

ここでとりあげる人物は学校長は戦前の50年間、学校創立の初代校長から第4代校長までの4名の歴代校長と明治期の教師と卒業生は大正期までとした。

ただし、各人物のなかで関連する形で他の卒業生もとりあげている。

学校創立以来、大正15年(1913)までの染織科、建築科、機械科、採鉱科及び機械科と採鉱科の専修科卒業生は1937名にのぼる。また昭和14年(1939)に応用化学科(現工業化学科)が加わり、戦後昭和23年(1948)に電気科、土木科、昭和37年、同38年に定時制と電子科が設置されて県下でも有数の大規模校として、創立百周年の平成8年(1996)までの卒業生22,018+ α 名を送り出している。

これらの、卒業生の中にはここに取り上げる人物と同様に多くの人たちが顕著な活躍をしてきているが、今後の調査をまわって、本書に続くものとしてまとめられることを期待している。